

討論メモ 「副首都構想と東京一極集中」

令和8年7月21日

森田晃司

1. 7月は、頭書の掲題のもと、国会で審議中の副首都構想の内容と一極集中との関連について考えてみました。

森田より、

副首都構想のメリット、

副首都構想のデメリット、

副首都構想と大阪都構想の違い、

副首都構想は一極集中の解消に役立つか、

一極集中の解消に向けての活性化策は？

活性化策の鍵は？

についての説明がありました。

2、引き続き出席者5名による討論に入り、下記のような意見が出ました。

- ・喫緊の課題が山積する中で、副首都構想はいま議論されるべき課題なのか？
- ・国会で本来審議すべき課題から逃げているのではないか。

- ・法案を読んでも、副首都構想の目的が分からない。
- ・AI で、バーチャル副首都を作ればよいのではないか。
- ・無駄な投資だ、大阪に予算を取り込むことだけが目的ではないか。
- ・文化庁を京都に移したが、日常生活に関連が薄いからできたのではないか。
- ・機能を分断するしかないが、どう分けるのか？
- ・人材を両方に置くのは無駄だ。
- ・下手に機能を分断すれば、国家の分裂につながる。
- ・担当大臣を新設する構想もあるそうだが、どんな権限を与えるのか。
- ・
- ・大企業の本社が大都市に集中するので、法人税が大都市に集中してしまう。
- ・スマートシティー構想は住む人は良いが、周辺の過疎化が進むのではない
か。
- ・“天神ビッグバン”と言われて福岡では高いビルの建設許可が下りて、町が変
貌している。

九州各地の人口は減少しているが、福岡市は増えている。

- ・産業革命から今日まで、ロボットや AI で人間の働き場所が奪われてきている。今後、生きる意味が問われる時代になるのではないか。

宗教の復活が必要か

- ・民主主義の欠陥があらわになってきている。
- ・自由貿易は強者のためのシステムであることがはっきりした。今後は、自給自足を目指すことが先進国の務めではないか。

以上

「イラン爆撃は収まるのか」と題して、イスラエル・アメリカの先制攻撃で始

まり、出口の見えない様相を呈しているイラン戦争について考えてみました。最初に森田より、

① 。イスラエルがイラン爆撃を開始し多目的について、

② 。米国が参戦した理由について、

③ 。出口戦略について、

説明があり、日本のとるべき対応などについて考えてみました。

2. 続いて出席者6名による自由討論に移り、下記のような意見が出されました。

- ・米国内でのトランプ支持率は急降下しているようだ。国民の声でイランからの撤退を決断させてほしい。

- ・熱烈なトランプ支持者の間でもトランプ離れが起きている。

- ・11月の中間選挙に向けて反対の声を上げてほしい。

- ・共和党は中間選挙では負けるだろう。

- ・トランプは認知症との噂もあるが、弾劾裁判で引きずりおろす手もある。

- ・ヴェネズエラ作戦がうまく行き過ぎ、イランも簡単に降伏すると勘違いしたのか。

- ・AIによるシミュレーションに頼りすぎて、イラン民族の反発を読み違えたのか。

- ・トランプの周りに人材がいないようだ。

・トランプは高関税政策などで FRB の弱体化を図ってきたが、これが金融資本の逆鱗に触れて、逆に追い詰められたのか。

・日米会談で高市首相は日本を破滅に追い込むような言質を取られないでほしい。

・自衛隊派遣はできないとはっきり言うべきだ。トランプに嫌われることを恐れるべきではない。

・G7 からもこの戦争について米国を支持しない声が出ている。高市首相も上手にこの流れを使うべきだ。

・スペイン、イタリア、ドイツは艦隊を派遣しないと声明している。

・日本は備蓄石油を放出する政策を早々と決めたが、備蓄を大切にし、石油消費を抑える政策をすべきではないか。

・イランは負けない戦略で長期戦にも耐えられそうだが、長期戦になれば、イスラエルはもたない。

・ホルムズ海峡は封鎖されたと言われるが、イランは敵対しなければ通すと言っ

ている。現にインドのタンカーが通過したと伝えられている。

- ・高市政権はイランによる周辺国への爆撃を非難しているが、偏った、バランスを欠く対応だ。改めて、中立の立場をとるべきだ。

- ・かつて、田中角栄元首相は、米国の要請を断り、中東戦争で中東との友好を堅持、石油資源を死守した。(米国の逆鱗に触れて、その後、ロッキード事件を仕込まれて政治生命を絶たれた)。高市首相に爪の赤を煎じてもらいたいところだ。

- ・機雷を敷設したとの情報もある。駆逐艦などによる護衛も役に立たないと言われている。

- ・海峡を安全に航行するには停戦、あるいは終戦が必要だ。

以上